

私はここにいる

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 北, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24774

私はここにいる

大学不教主任

北

博

列王記上、第十九章、一、二節

「アハブは、エリヤの行つたすべての事、預言者を剣で皆殺しにした次第をすべてイゼベルに告げた。イゼベルは、エリヤに使者を送つてこう言わせた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあゝの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してください。」」

それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シエバに来て、自分の従者をそこに残し、彼自身は荒野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下の木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願つて言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」彼はえにしだの木の下の横になつて眠つてしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入つた瓶があつたので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になつた。主の御使いはもう一度戻つて来てエリヤに

触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。⁸ エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。⁹ エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、上の言葉があった。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」¹⁰ エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」¹¹ 主は、「そこを出て、山の中で私の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中にはおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。¹² 地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。

エリヤ物語には、多くの地名が出て来ます。エリヤはかなり広い範囲を歩き回った末、遂にサマリアでアハブ王の前に姿を現します。当時のサマリアは、イスラエル王国、つまり分裂したイ

イスラエルの北王国の首都で、宮廷がそこにありました。エリヤはアハブ王に対して、バアルの預言者達と対決することを告げます。そして対決は、北西のフェニキアとの国境付近に位置するカルメル山で行なわれました。エリヤがこの対決に際して行なったことは、かつてのイスラエル十二部族連合の原点に立つて、古い壊れた祭壇を修復することでした。エリヤはこのことによって、イスラエルの神がヤハウエであり、フェニキアのシドン出身の王妃イゼベルが自分の出身地から持ち込んだバアルではないことをはっきりと示します。しかしそのことでエリヤは、イゼベルの恨みを買ひ、追われる身となってしまいました。以上がこの場面の背景です。

エリヤは北イスラエルから南のユダ王国のそのまた南のはずれにあるベエル・シェバという乾燥地帯まで必死に逃走した末、遂に覚悟を決めます。しかし神の御使いに食物と飲み物を与えられて励まされ、力を得て更に南へ南へと荒れ地をひたすら歩き続けます。そして四十日四十夜の苛酷な行軍の末、遂に神の山ホレブに辿り着き、そこで神に出会うのです。

しかし、神の顕現は意外な形で行なわれました。まず、山を裂き、岩をも砕くような激しい風が吹きましたが、神はそこにはいませんでした。続いて地震がありました。その中にも神はいませんでした。更に火が起りましたが、その中にも神はいませんでした。そして一連の天変地異がすっかり過ぎ去り、すべてが静まり返った後に、静かにささやく声が聞こえました。そこ

でやっとエリヤは神がそこにいることを確信し、外套で顔を隠して洞穴の外に出たのです。外套で顔を隠したのは、神との出会いのためです。あまりに清い存在である神を直接目にとると、人間は死んでしまう恐れがあるからです。

この物語では、神の本質について、つまり神がどういう存在であるかということについて、周到に練られた表現で語られています、まずここでは、神を天変地異と結び付ける考えが拒否されています。確かに神は、その気になれば天変地異を起こすことも出来ましようが、そこに神の本質があるわけではない。神の神たるゆえんは、奇跡を起こす力にあるわけではない。神は、奇跡を起こす力を見せつけることによって人間を服従させようとするような存在ではありません。もともと、人間の側はそれを望むことが多いのですが。同時にここでは、神をある特定の場所、聖なる地と結び付ける考えも、注意深く避けられています。イスラエルの神は、ある人物や人々の集団を既存の場所から別の見知らぬ土地に移動させ、その旅を導く神、つまり「共に歩む神」であつて、特定の場所と結び付いた土地の守り神ではありません。これが旧約聖書の神の一つの大きな特徴です。

ところで、エリヤは静かにささやく声を聞いた時、なぜ神がそこにいることを確信したのでしょうか。ここで少し、出エジプト記三章に書かれたモーセの召命記事を読み直してみましょう。モー

セは、羊の放牧をしていました。場所はエリヤの場合と同じ、神の山ホレブです。燃え尽きない柴の中に顕現した神は、モーセに向かって虐げられたイスラエルの人々をエジプトから導き出すよう命じます。それに対して戻込みするモーセに、神はこう言います。「私は在る、あなたと共に」。更に、神にその名を明かすよう求めるモーセに対して、神はなぜか「私は在る」を何度も繰り返します。この謎めいた言葉、「私は在る」は、ある意味ではモーセの求めに対する拒絶でした。モーセは神の名を知ることによって、その奇跡を起こす力に自分も与りたいと考えたのでしようが、神は自分が地上のあらゆる存在形式に制約されることのない自由な存在であることを、ここで示したのです。「私は在る」。それによって神は、自分の存在が人間の側のあらゆる概念化を許さない、存在そのものだとすることを明確にします。そうした後、初めて神は自己限定し、自らの名を開示します。「ヤハウエ」、つまり「彼は在らしめる」、これが神の示した自らの名です。すなわち、在らしめる者、出来事を起こし新しい事態を来たらせる者として、神は自らの存在を具体化するのです。そして「ヤハウエ」は、その名の通り、出エジプトという新しい事態を起こしました。

神がモーセに対して繰り返し告げた「私は在る」という言葉は、原語のヘブライ語では「エフィエ」という柔らかい響きを持つ音です。それは静かな風のそよぎのようにも聞こえる音です。エリヤが天変地異の後、その中に神がいないことを知って失望を味わいながら静寂の中にかすかに聞き

取ったのは、実は頬に感じた微かな風の音だったのではないでしょうか。しかしエリヤはこの微かな風の中に、「エファイエ」、私は今ここに、あなたと共に在る、という神の語りかけを聞き取ったのです。

エリヤが追い込まれた状況は、どのようなものだったでしょうか。それは、この上もなく絶望的な状況でした。事態を一転させる奇跡的事態も起こらず、絶体絶命の危機の中で、彼は死を覚悟したことでしょう。しかしこの究極的状况の中に、エリヤは神をこの上もなく身近に感じ取り、今ここに神がいることを確信したのです。

私達は大きな災害に見舞われ、心身ともに深い傷を負いました。ある人は肉親や親しい友を失い、ある人は家を失い、ある人は仕事を失いました。誰しも、なぜ自分達がこんな目に遭わなければならぬのかと思っていることでしょう。それはまさに、神不在の状況です。しかし悲しみと苦しみの果てで、神が共にいることを感じた人、それを実感した人も多いと思います。絶望の中に微かな希望を感じ、ふと小さな力が沸いて来た瞬間がありませんか。その瞬間の希望の実感こそ、神が今ここに、わたしと共にいる、というしるしなのです。